

〔通俗編<sup>十</sup>〕嚏<sup>〇</sup>祝<sup>〇</sup>。  
童婦輩猶相承襲。

〔徒然草<sup>上</sup>〕或人清水へ参りけるに、老たる尼の行つれたりけるが、道すがら、くさめくといひもてゆきければ、尼御前何事をかくはの給ぞととひけれど、もいらへもせず、猶いひやまざりけるを、度々とはれて、うち腹だちて、や、はなひたる時、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、やしなひ君のひえの山に兒にておはします、が、たゞ今もや、はなひ給はんと思へば、かく申ぞかしといひけり、有がたきこゝろざしなりけんかし。

〔徒然草文段抄<sup>二</sup>〕はなひたる時といふより、尼が答の詞也、是は乳母がたのならはしに、其兒のはなひたる時、かたはらの人はなを合すとて、又くさめと云也、もしはなをあはせざれば、其はなひたる兒に害ありといひならはせり、其故に、今も守刀などに、鼻の糸とて、青き糸をつけて、兒のはなひたる時、彼はなを合す代に、其糸をむすぶ也、此まじなひの心にて、此段を見侍るべき也、かの尼が詞にはなひたる時、かくまじなはねば、死ぬるなりと申せばといへる、すなはち是也、其はなをあはせんとて、くさめくといひし也。

〔嬉遊笑覽<sup>八</sup>方術〕嚏の頌<sup>〇</sup>中

萬葉集<sup>十</sup>一眉根搔<sup>ハナヒ</sup>鼻火紐<sup>ヒトケ</sup>解待<sup>トケマテ</sup>八方<sup>モトヤ</sup>何時<sup>トキカ</sup>毛將<sup>モウシ</sup>見跡<sup>ミト</sup>戀來<sup>コシワレ</sup>吾乎<sup>ワレ</sup>集中<sup>シウチュウ</sup>はなひる事をよめる歌、この外にもあり、詩邨風に、寤言不寐、願言則嚏といへるとおなじく、人におもはるれば、はなひるとなり、後には、其意うつりてわがうへを、かぎにて後言する者あれば、嚏るとて、わろき事とす、又天竺には、もとよりこれをよからぬ事とするにや、四分律に、世尊嚏、諸比丘呪願言長壽、といへること見えたり、古今集<sup>雜</sup>出て行ん人をとゞめんよしなきに、となりのかたにはなもひぬかな、袖中抄に、はなひる事、いかにもよからぬ事なり、年の始に、鼻ひりつれば、祝ひごとをいひて祝ふなり、され